

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32639

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02623

研究課題名(和文) 二人称的アプローチによる乳児期の仲間とのかかわりのはじまり

研究課題名(英文) The Beginning of Engagement with Peers in Infancy from the Perspective of the Second Person Approach

研究代表者

岩田 恵子 (IWATA, Keiko)

玉川大学・教育学部・教授

研究者番号：80287812

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、二人称的アプローチにより、乳児の仲間とのかかわりあいを明らかにすることを目的とした。本研究は、はじめ仲間と継続的に過ごす機会のある保育の場と初対面の仲間と関わる実験室の場での比較研究を予定していたが、コロナ禍の影響で、保育の場のみが対象となった。0歳児クラスを担当する保育者のインタビューから、仲間とのかかわり合いについて見えてきたことは、食事をはじめとした生活を共にする場面で相手を意識する様子が見られ始めること、魅力的に感じる相手を後追いし、模倣することが見られること、魅力的に感じるモノを介してやりとりが始まることが多いことである。今後、動画による微視的な分析を予定している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、0歳台から保育の場で過ごすことの意義の一端を明らかにすることができた。0歳児は決して受け身の存在ではなく、自ら関わりようとする存在であり、その関わりようとする対象は保護者、保育者だけではなく、周囲にいる仲間、モノにも向けられている。そこから得られる体験、学びが多様であることが示され、保育の場で過ごすことに、子ども自身にとって意味があることが示された。低年齢の保育は、保護者の就労、子育て支援のためのサービスの側面から捉えられることが多いが、子ども自身にとっても意味ある場、時間であることを示すことができたことは、意味ある結果であると捉えられ、今後さらに探究を深めたい。

研究成果の概要(英文)：This study explored infants' interactions with their peers using a second-person approach. This study was initially intended to be a comparative study between childcare (i.e., children have opportunities to continuously spend time with peers) and laboratory settings (i.e., children are involved with peers they have never met before); however, only childcare settings were included because of the COVID-19 pandemic. Regarding children's interactions with peers, interviews with caregivers in charge of the 0-year-old class revealed that the children began showing an awareness of their peers in situations where they shared life together, including eating; that they followed and imitated peers they found attractive; and that they often initiated interactions through objects they found attractive. This is because they often begin interacting with each other through objects they find attractive. We do plan to conduct a microanalysis using videos in the future.

研究分野：保育学

キーワード：二人称的アプローチ 乳児保育 おもしろさ ドキュメンテーション

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

乳児が世界と二人称的にかかわりあう驚くべき世界があり、そのような驚くべき世界は、大人が乳児に二人称的にかかわりあうことで見えてくるのが、Reddy (2008/2015) によって指摘されている。しかし、そのような二人称的にかかわりあいの視点で明らかにされてきているのは、乳児と大人とのかかわりあいであり、乳児の仲間とのかかわりあいは、明らかにされてきていない。そこで、本研究においては、二人称的アプローチにより、乳児の仲間とのかかわりあいのありようを明らかにすることを目的とし、主に以下の2つの場面の比較検討を行うことを目指した。1) 保育実践の場における継時的な乳児間のかかわりあい。2) 実験室における初対面の乳児間のかかわりあい。いずれの場面も二人称的アプローチにより分析を行うことにより、乳児の仲間とのかかわりあいの発達を描き、より質の高い乳児保育への示唆を得たいと考えた。

2. 研究の目的

本研究においては、二人称的アプローチにより、乳児の仲間とのかかわりあいのありようを明らかにすることを目的とした。そのために、主に以下の2つの場面の比較検討を行なう予定であった。

(1) 保育実践の場における継時的な乳児間のかかわりあい。

(2) 実験室における初対面の乳児間のかかわりあい。

しかし、本研究の実施期間が、コロナ禍と重なったため、初対面の乳児のかかわりあいの研究は断念せざるを得ず、二人称的アプローチにより保育実践の場における乳児間のかかわりあいについて探究することを目的とした。

3. 研究の方法

新型コロナウイルス (COVID-19) の影響を受け、保育の実践現場で保育者が研究のために録画を行うことや、大学の赤ちゃんラボに複数の赤ちゃんにきてもらうことという、当初の研究計画で考えていたかたちでの、データを実際に収集することは難しく、コロナ禍前の予備調査までで、中止せざるを得なかった。

そのため、保育実践の場における乳児の仲間とのかかわりあいのありようについて、三園の協力を得て、担任保育者へのインタビュー、及び、保育者自身の日常の記録から検討を行った。

令和5年度においては、一園の協力のもと、月1回研究者の観察及びビデオ撮影も行い、録画データについては具体的な乳児のやりとりの微視的な分析を行う資料として収集した。

4. 研究成果

保育者へのインタビュー及びフィールドワークによる観察から見えてきた乳児の仲間とのかかわりあいのありようの特徴は以下の3点にまとめられる。

(1) 相手を「見る」ということ

0歳児クラスの子どもたちの様子からは、かかわりあいの基盤として、周囲を「じっと見ている」時間の大切さが見えてきた。保育の場で過ごし、周囲で生じている出来事を見ていること自体が、子どもにとって非常に大きな意味を持っている。

たとえば、ある園でのおやつ場の場面の出来事をあげる。その園では、0歳児から5歳児までが共に暮らす部屋を共有していたこともあり、さまざまな年齢の子どもたちがちゃぶ台を囲んで食事やおやつを食べていた。その日、その部屋で過ごす0歳児2名は、おやつの準備が始まった最初に、赤ちゃん用の椅子に座るかたちで、ちゃぶ台を囲み、自分の分のおやつをお皿に載せてもらっていた。保育者ともやりとりしながら、おやつを食べているのだが、その同じちゃぶ台を囲んで、年上の子どもたちがやってきて、おしゃべりをしながらおやつを食べている。0歳児2名はその様子をじっと見つめている。ときにはその視線に気づいた年上の子どもが、視線を合わせたり、話しかけたりもする。年上の子どもたちは、おやつを食べ終わると、その場を去って遊びに行くが、また他の子どもがやってくる。他の子どもたちのやりとりやおやつを食べる様子もじっと見ながら、ときどき自分のおやつをゆっくり食べる0歳児の姿があった。その部屋でおやつを食べていた時間の最初から最後まで、0歳児はちゃぶ台を囲んでおり、最後誰もいなくなったところで、満足げな表情で、口と手を保育者に拭いてもらって椅子からおりていた。このように、おやつ場面ひとつをとっても、周りを興味深くじっと見ながら豊かな時を過ごしている。

このおやつ場面をはじめとした生活のさまざまなこと、さまざまなモノとのかかわりが見られる遊び等、一日の時間を共にする中で、他者を意識する様子が視線からはっきりと見てとれることが明らかとなった。

(2) 相手を追いかけ、模倣すること

0歳児クラスの子どもたちは、自分での移動が可能になると、魅力的に感じる対象に向けて、

自分で移動していく。その魅力的に感じる対象が仲間であるときには、後追いし、模倣することが見られた。この事例としては、ある0歳児クラスの誕生日がほぼ1ヶ月違いの男児2名の様子があげられる。歳下の男児は、入園した頃から、1ヶ月歳上の男児のしていることをじっと見ていることが多く感じられる。やがて、園内を自由に動くようになると、歳上の男児の後を追いかけて移動していくことが多くなる。興味を持つモノも、歳上の男児が遊んでいるモノが多く、また、同じようにそのモノを扱おうと試みることが多い。また、モノの扱いだけではなく、動き、動作についても、真似ている様子が見られた。

模倣は、これまでの研究でも、乳児同士のかかわりあいの始まりとして注目されていた行動である。この模倣が生じる関係が、0歳台から始まること、また、模倣する相手については、まずはじっと見るところから始まり、自ら追いかけて、近づいていくということが、明らかとなった。

(3) 魅力的に感じるモノを介してのかかわりあい

従来の研究でも示されていたが、0歳児クラスの子どもたちのかかわりあいは、魅力的に感じるモノを介してやりとりが始まることが多い。

その中には、歳上の子どもたちがしていることにひきつけられる場面も多くあった。ある保育室で、机を囲み、紙とマジック、ハサミなどを使って、制作をしている2歳児と3歳児、保育者の姿があった。それぞれ作りたいモノをイメージしながら、おしゃべりしながら過ごしている。そこに、0歳児クラスのように歩くようになった女児が近づいてきた。机につかまり立ちをしながら、2歳児と3歳児のすることをじっと見ている。やがて、吸い込まれるように、女児も紙に手を伸ばし、触り始める。保育者は、使っていないハサミをさりげなく自分のポケットに入れ、0歳児、2歳児、3歳児とおしゃべりしながら、制作を一緒に続けていた。0歳児はその後、マジックも手にとって試みようとしていた。

また、0歳児クラスの男児が、じっとテラスの方を見ていることに気づいた。その視線の先を見てみると、夕立のような激しい雨が降った後のテラスの水たまりを、デッキブラシで拭いている保育者と4歳男児の姿があった。男児はじっとその様子を見ていた後、そっとテラスに出ていき、近づいていく。そして、デッキブラシを保育者から渡してもらい、笑顔で同じようにしてみようと試みる。なかなかうまく水を拭き去ることはできないが、4歳男児の後を追いつつ、同じように動こうとしている様子が見られた。

遊びとして行っていること、生活の一部として行っていること関係なく、0歳児の眼差しはさまざまな出来事に注がれている。その眼差しの行先からは、仲間の用いているモノ、行っているコトが魅力的であることが見えてくる。そして、そのモノ、コトに自らも関わることから、かかわりあいが始まり深まる様子が見えてきた。モノに魅力を感じることで、そして、その魅力を感じる際の多くの場面で、仲間が使っていることが伴っていることが見えてきた。

5. 成果から得られる示唆

本研究で見られた0歳児クラスから始まる仲間とのかかわりあいについてのインタビューからは、子ども同士のかかわりあいをみる視点の重要性も明らかになった。

0歳児の子どもたちの様子をインタビューする際、保育者が気にかけてくださったのは、客観的な出来事として語れているか、誰が何を「できる」ようになったかを伝えられたかという視点であった。このような保育者の子どものことを語る姿勢に、「能力」に縛られた見方、すなわち、「できたこと」で見ること、〇歳という年齢でみる見方が感じられた。

しかし、子どもがかかわりあうことを捉える際には、そのような「能力」の呪縛から解き放たれる必要がある。能力に呪縛されていると、あらかじめ定義された“よさ”を通してしか子どもが見えてこず、何気ないが重要な子どもの姿が見過ごされるからである。

その呪縛から抜け出して、子どもたちの日常の出来事を語ってもらう可能性は、何をしようとしているかわからない、おもしろそうだ、大人があたりまえと思っていることをずらすような未知性の世界について尋ねることから生じた。そのような子どもの時間に、保育者も自分自身を投入しており、「いいことを思いついて」もない時間を、子どもと共に丁寧に過ごしている日常を伺うことで、子どもたちのかかわりあう世界が少しずつ見えてきた。

この子どもたちそれぞれの「おもしろがる」世界に巻き込まれ、自分ごとのように感じ、一緒に考え、一緒に味わうことが、「よさ」の未定義性を共に探究するためには重要であると捉えられる。子どもが何を思い描いているかの世界を、私たちも思い浮かべ、もっと豊かな世界の魅力にひきこまれることが、保育における出来事の理解を深める際に重要であることを視点に、得られた映像データも二人称的アプローチにより微視的に分析していくことを課題としている。

<引用文献>

Reddy, V. (2015) 驚くべき乳幼児の心の世界-「二人称的アプローチ」からみえてくること (佐伯胖, 訳). ミネルヴァ書房. 18-19 (Reddy, V. (2008). How infants know minds. Cambridge: Harvard University Press.)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岩田恵子
2. 発表標題 保育において「おもしろさ」を「共に」探究する：“よさ”の未定義性を共にしていくこと
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会 自主シンポジウム「保育における“よさ”の未定義性」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩田恵子
2. 発表標題 子どものおもしろがる世界に感じ入る：学生の表現としての実習日誌を手がかりに
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会 自主シンポジウム「“おもしろさ”が見えるとき 表現を手がかりにして 」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Keiko Iwata, Hirotomo Omameuda
2. 発表標題 The importance of ‘visualization’ in the process of understanding children
3. 学会等名 EECERA (European Early Childhood Education Research Association) 2019 conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------